

子どもが全員参加できる授業づくり

—ユニバーサルデザインの観点を取り入れて—

教育実践研究科 教職実践専攻 教育実践基礎領域
石川恵理

I はじめに

大学在学中に学習支援サポーターとして、発達障がいのある児童に対する個別の支援を行う活動を行ってきた。その際に初めて発達障がいのある児童と接した。児童と接するなかで、自分の気分によって、大きな声を出したり、廊下に出ってしまったりと、集団行動が出来ない、わがままな児童だと感じた。児童の行動を観察すると、友達に対する接し方も暴力的であったりもした。友達に暴力をふるってしまった後に、そのような態度はふさわしくないと話をしても、目を見て話を聞くことができず、体を揺らし、表情も反省をしていない様子であり、その児童にがっかりした経験をした。友達を暴力で傷つける行為は絶対に行ってはならないという強い思いを私は抱いた。友達に対する思いやりを持った行動がとれるように、私はその児童に伝えたいと強く思うようになった。その児童に伝わる伝え方をしなければならぬと感じた。それ以来、児童の個性に合わせた指導の方法を学びたいと思うようになり、児童の特性の理解を深めたいと思うようになった。このような思いで私は教職大学院に入学した。

教職大学院に入学し、引き続き大学時代にお世話になったA市立B小学校で学校サポーターをさせて頂くことになった。大学時代は、1年生の発達障がいのある児童の支援を中心に行っていたため、かかわる児童は限定されていたが、学校サポーターとして様々な年齢の児童と関わる事ができた。大学時代に見てきた当時の児童のような特性を持った児童は、他の学年にも在籍していた。大学時代に見てきたような目立ち方をする児童もいれば、違う行動で目立つ児童もいた。この時に、同じ様に目立つ児童でも、一人一人違う態度で行動していることに気付いた。多動で、自分の席に着くことができず、教室を歩きまわったり、勉強している友達に話しかけに行ったりする児童もいれば、教師に対して、言葉や態度が反抗的であり、相手を攻撃するような言葉を多くつぶやく児童もいた。また、授業中にはほとんどの時間を机の上でうつぶせになって過ごし、教師の言葉に反応せず、無視するように振る舞う児童もいた。他にも、過去の担任の先生の指導の方法を許すことができず、ずっと不満をもって過ごしていると突然打ち明けてきた児童もいた。本当に様々な児童がいることを知った。児童の様々な態度に担任

の先生が苦勞して対応している姿も見た。教師力向上実習では、特にコミュニケーションや人との関わりに困難をもつ児童や多動の児童が多いクラスで実習を行わせて頂くことになった。学級担任のA教諭の指示はとても分かりやすく、児童が動きやすい印象を持った。様々な特性を持つ児童に対して、それぞれの児童に合った接し方を学びたいという思いで、実習を行った。実習では、さまざまな個別の特性を持つ児童も学習に参加し、全員が授業に参加できる授業を目指した。児童の特性によっては、児童の動きにより授業の進行が妨げられたり、否定的な発言により、学級の雰囲気が悪くなったりする場面がある。そのような意味でも、さまざまな特性を持つ児童全員が、授業に参加することができれば、すべての児童にとって価値のある授業時間とすることができると考えた。

II 主題設定の理由

1. 「授業のユニバーサルデザイン研究会」の考え

私の大学時代や学校サポーターの経験では、発達特性により、身勝手と思われるような行動をし、他の友達の学習の妨げをしたり、本人が学習に向き合うことができない児童も、授業に参加することができない授業を目指したいと考えた。

その際に、授業のユニバーサルデザイン研究会の存在を知った。授業のユニバーサルデザイン研究会では、教科教育に特別支援教育の視点を取り入れ、児童全員が分かる授業を目指し、児童全員が授業に参加できる授業を作ることを目指している。児童に個別の目標を設定したり、その個別の目標を達成するための活動を用意したり、特別な支援が必要な児童も授業に参加できるように、授業のねらいや活動に幅を持たせたり、個別のニーズや特性に応じて、仮説を立てて、授業を検証していくという手立てで、全員参加の授業を実現するという考えである。

これらの手立ての中でも、特に個別のニーズや特性に応じて、仮説を立てて、授業を検証していく考え方に共感した。先に挙げた個別の目標やその目標を達成するための活動を用意する事は、その児童にとって有効なことであるかもしれないが、実際の学校現場において、学級担任が一人で授業をする中で行うことができる個別指導は限られていると考えられる。個別の指導内容の検討よりも、該当する児童の特性に応じて仮

説をたて、それを踏まえて授業の中の発問や活動内容の検討に生かしたいと考えた。例えば、学級に場面緘黙の児童がいたとする。児童は家では話をするが、学校では一切話をしたことがない。この児童の特性から、授業の中で発問に対して挙手をし、発表をするという事は難しいと考えられる。その児童も授業に参加させるために、発問における指示を口頭で発表するのではなく、指さすとすることができる。このように児童の特性を踏まえて仮説を立て、発問や活動内容に工夫をすることで、全員参加の授業が実現できる。

また、授業の中での発問や活動内容に工夫をすることで、配慮の対象にした児童以外の、他の児童に対しても分かりやすく、参加しやすい授業にすることができる。一人の児童に対する配慮が、他の児童に対しても価値のあるものになるというユニバーサルデザインの概念が、私が見てきた学校現場においても有効であると考えたため、このユニバーサルデザインの観点を取り入れた全員参加の授業づくりという主題を設定した。

2. 二年目の実習学級に学んで

A市立B小学校での学校サポーターで配属された学級は、コミュニケーションや人との関わりに困難をもつ児童や多動の児童が多い学級である。A児は、皆と同じように朝の準備ができず、一人だけ朝の会の時に机の上に水筒を置きっぱなしにしていることがある。私がA児に対して、水筒を片づけようと言われても、「嫌だ。めんどくさい。」と言って水筒を片づけることができない。B児は、友達に対して自分からパンチをしたために、やり返されたことに対して、「バカ。アホ。死ぬ。」と暴言を吐き暴力をふるったりする。C児は、先生の話を聞く場面でも、指先をいじり、話を集中して聞くことができない。具体的に挙げた児童以外にも様々な特性を持つ児童が在籍する。

配慮が必要な児童が多い学級の中でA教諭により、気持ちの良い学級経営が行われていた。私が観察して、児童がテキパキと動き、見ていて気持ちが良いと感じた。教諭自身も児童がスムーズに動くことで気持ちの良さを感じていると思う。その気持ちの良さは、児童自身が一番感じていることであると思われる。A教諭の指導は、児童が待つ時間が無い。児童の動きにタイミングよく指示が出される。児童が集中を切らす前に次の指示がテンポよく出されるために、児童が動きやすいと思われる。また、A児やB児やC児への指導も児童と教諭が笑顔になれるような余裕のある指導が行われている。A児に対しては、何時までに水筒を片づけようと言われても、想像力豊かな児童であるために、水筒をバスケットボールに見立て、「ヘイ、パス」と言って、決められた水筒の置き場に置きに行かせていた。B児に対しては、興奮状態にある場合には人目につか

ない静かなところへ移動させ、「本当はみんなと仲良くなりたい。友達が欲しい。」というB児の思いに寄り添い、どのような態度を反省し、どのような態度がふさわしかったかを振り返らせていた。また、B児がトラブルになることが多い書写の時間の前には、事前にどのように行動をとるべきかを伝えており、トラブルを回避していた。C児に対しては、他の児童も含めて、話を聞く姿勢の基本は、手は膝の上に置くとしつけていた。学級が始まって半年以上たった時点でも、話を聞く姿勢について、児童本人が自覚できるまで待つことを行っている。

これらのA教諭の指導から、児童の得意な点や苦手な時間などの特性を考慮して児童が動きやすい指示をすることは、児童にとっても、教師にとっても気持ちの良いことであると学んだ。この児童は、このような特性を持っているから、このような指示をすれば、お互いが気持ちよく動くことができるという視点で児童に指導をすることを目指したいと考えるようになった。このような視点を踏まえた授業は、まさに授業のユニバーサルデザイン研究会が述べる教科指導に特別支援教育の視点を取り入る全員参加の授業づくりであり、学校サポーターで配属された学級における授業づくりにおいて有効であると考えられ、ユニバーサルデザインの観点を取り入れた全員参加の授業づくりを主題とすることが適切であると考えた。

III 主題に関わる授業の構想と実践

1. 基本的な考え方

授業のユニバーサルデザイン研究会の桂聖（筑波大学附属小学校）は、目の前の児童の躰きを想定した時の授業改善として「視覚化」「焦点化」「共有化」を提案している。（桂 2012）この論を受け、以下のように私は授業における「視覚化」「焦点化」「共有化」を捉えた。

視覚化とは、視覚的な手がかりを活用することである。授業において焦点を当てる言葉や、核心に迫る児童の発言を、文字として板書をしたり、電子黒板で示したり、絵や図で示したりする工夫である。聴覚情報だけでなく、視覚的に分かり易くすることで、児童の理解を助けることにつながる。また、視覚的な刺激があることで、授業に児童を注目させることができる。

焦点化とは、授業のねらいや活動を絞ることである。授業のねらいを絞ることで、活動を絞ることができる。それに伴い、発問や指示を絞ることができ、児童が今から何を学ぶのか、今から何をすべきなのかを理解しやすくすることができる。このようにして児童は授業に参加することができ、今日授業で何をして、何を学んだのかという児童自身の自覚にもつながり、児童の学習における達成感や学習を行ったという実感にもつながる。

共有化とは、表現する機会を小刻みに入れることである。ペアで意見を述べ合ったり、グループで意見を述べ合う機会を入れることで、児童が表現せざるを得ない状況をつくる。児童一人一人が表現することは、授業に参加する事につながる。また、意見交換を通して、新しい考え方に会うこともできる。

以上の観点を踏まえて、教科教育と特別支援教育が融合した全員参加の授業づくりを目指すことは、授業の展開において、「視覚化」「焦点化」「共有化」を意識することと、支援が必要な児童の特性を考慮して仮説を立てて、授業づくりを行うことであると捉えた。

2. 具体的な実践の手立て

教師力向上実習ⅠとⅡでは、学級活動、国語の「漢字辞典の使い方を知ろう」「連詩にちょうせんしよう」の単元の授業を実践した。

(1) 学級活動

① 視覚化、焦点化、共有化

視覚化として、ペアでの脱力のストレッチの方法を絵や図や言葉で示すのではなく、実際に見本として行って見せる。電子黒板を用いて、歌の動画を流し、登場人物の関係性などの説明を踏まえながら、笑顔で楽しく歌わせるための手本として見せる。歌詞を拡大して、黒板に貼り、顔を上げて歌が歌えるようにする。歌を歌っている際には、今気を付けるべき課題をフラッシュカードとして示し、「笑顔で歌う」などの課題を教師が大袈裟に行い、実際の手本として見せる。

焦点化として、何度も歌う中で、今気を付けるべき課題を限定する。最後の振り返りの部分では、課題の中から、一番頑張れたことに注目させ、課題に対する児童自身の取り組み方に限定して振り返らせる。

共有化として、授業の始まりに、男女混じったペアで脱力のストレッチを行う。歌を歌う際に、3回目までは、学級全体で歌に親しめるように課題などを意識して取り組む。4回目以降は、グループに分かれ、グループの中の男子同士、女子同士で、男女のパートを歌うように練習をさせる。まとめでは、グループ内で目を見ながら歌わせる。

② 支援が必要な児童を配慮した授業づくり

A児は、皆で動きを伴う活動に関しては、仲のいい男子児童と楽しみながら取り組むことができる。配慮すべき点は、登場人物の掛け合いがある映像を見せた際に、映像に対して、想像を膨らませて、自分で話を作り、周りの児童に対して話し出してしまうことが予想される点である。その点を考慮して、歌の雰囲気をつかませるために、3回は、映像に合わせて歌わせた後、引き続きの練習は、CDのみで行い、視覚的な情報を限定する。

B児は、ディズニーや歌うことが好きなため、活動内容については、興味を持っていると考えられる。配

慮すべき点は、友達とペアを組んで脱力のストレッチを行う際には、活動に対して取り掛かるきっかけがつかめずにいる点である。また、グループ内で、歌う役の分担を決める際に、自分の意志だけを主張して、協力して決めることができないことが考えられる。これらの点を考慮して、ペアでの脱力のストレッチの際には、何から始めるべきかを明確に指示をする。グループ内での役の分担を決める際には、時間を限定して決めさせ、それでも決まっていなかった場合には個別で支援を行う。支援を行う際には、話し合いで決まらない場合には、じゃんけんなどで、公平に決める。

C児は、朝の会で口を開けて歌うことができているため、歌う活動に対する抵抗感はないと考えられる。配慮すべき点は、活動場所が慣れない音楽室のため、いつもの教室に比べて気持ちが高まってしまい、開放的に動いてしまう点である。そのため、活動ができる区域を制限し、椅子をおいて、椅子の手前まで使えることとする。

(2) 国語「漢字辞典の使い方を知ろう」

① 視覚化、焦点化、共有化

視覚化として、板書するめあてを赤の枠で囲み、強調する。書画カメラを使い、手順が難しい部首索引の使い方を正しく理解させる。また、部首索引の使い方の手順を番号と矢印の図で示し、板書する。

焦点化として、自由に漢字を調べるのではなく、一文字一文字の意味に注目させるため、自分の名前と家族の名前の漢字を調べさせる。また、どの字をどの索引を使って調べると早く正確に調べることができるかというコツを身に付けさせるため、例として漢字を3つ挙げて、検討し、調べる。

共有化として、授業の始まりでめあてを、声をそろえて、全員で読ませる。どの漢字をどの索引で調べると早く正確に調べることができるかという授業の目標を達成するための活動を、ペアで相談させ、その後に全体で検討する。調べ方も正しい調べ方が出来ているかを、ペアでチェックさせる。名前を調べさせた後に、全体で発表させ、加えて感想を述べさせる。

② 支援が必要な児童を配慮した授業づくり

A児は、日頃使わない漢字辞典を使うことに対しては、興味を持つことができると思う。漢字辞典の使い方に関して、自分なりのルールで使ってしまうことが考えられるため、使う手順を明確にする必要がある。調べた字を記録する際に、ノートの線に沿って書けないことが予想される。ワークシートで書く範囲を限定して、書かせる必要がある。

B児は、自分の事や家族の事に対する興味を強く持っているため、名前の漢字を調べる活動に対しては、意欲的に取り組むことができると考えられる。漢字辞典の使い方の手順を口頭で説明しただけでは、正しく

理解することが難しいだろう。書画カメラで手順について注目させ、加えて、手順を図で示し、理解させることが大切になると考えられる。

C児は、調べるという動きを伴う活動に対しては、意欲的に取り組むことができると思う。授業の始まりで、休み時間と授業の区別を付けさせるために、めあてを声に出して、しっかりと読ませることで、授業をすることに注目させることができると考える。自分の名前を調べた後に、手持無沙汰になると手遊びをしたり、近くの席の児童と話し始めてしまうことが考えられる。自分の名前を調べることが終わった人から家族の名前を調べるといった指示を出しておく必要がある。

(3) 国語「連詩にちょうせんしよう」

① 視覚化、焦点化、共有化

視覚化として、毎時間の授業の導入では、前時に使った同じフラッシュカードを用いて復習を行うことで、前時の内容を思い出し易くする。言葉集めの際には、題から想像を膨らませて、多くの言葉を集めることができるように、ワークシートを枠と矢印で言葉から続けて連想できるような形式にする。言葉集めで集めた言葉から、詩全体のイメージを色でつかみ、どの言葉を使って詩を書くかを決めるために、イメージに合う色で、使いたい言葉をクーピーで塗らせる。詩を書く活動では、書きたいことを羅列して書くのではなく、詩として書く言葉を抜粋させるために、枠を用いて、ワークシートに書ける分量を制限する。友達の連に続けて書く時に、グループでのワークシートを回すまわし方を、色画用紙と矢印を使って図で示す。また、連ごとに起承転結という連の役割を踏まえた上で、自分の連を書くために、玉子という題でオムレツを作ることを例えとして、起承転結の意味を絵で示す。班で完成した連詩を発表する際には、どんな言葉で綴られている詩であるかを分かりやすくするために、電子黒板で詩を表示して、発表させる。

焦点化として、連詩を書き始める前には、題から想像させ、言葉集めをさせる。その後2連の連詩を書き、その後に、4連の連詩を書かせる。活動を限定し、段階的に連詩を書かせる。4連の連詩を書く際には、起承転結で構成される連の役割を理解させて連詩を書かせるために、特に転の役割を意識することに限定する。起承転結は、児童はまだ学習していない。そこで、分かりやすい転に焦点を当て、例えばオムレツの具にチョコレートを入れることを示し、特に転を「驚きの転」として捉えさせる。完成した連詩の発表を見る際に、「どう感じたか。」「どの部分が良かったか。」「書き方の工夫」「どのように想像を広げているか。」という4つの視点に限定し、個人やペアで発表について意見を述べ合わせる。

共有化として、題を決めて書く際に、書きたい題と

して同じ題を挙げた者同士でペアを組ませる。詩の表現の工夫として、比喩を使って書いたり、繰り返しを使って書けた児童の作品を取り上げ、新しく詩を作る活動の前に紹介する。自分の連を書く活動をする前に、前の連の理解を深め、前の連を受けて、自分の連を書くために、ペアで、友達が書いた連を友達に読んでもらい、音読を聞いて、友達の書いた前の連を理解してから書かせる。完成した作品は、皆の前で発表し、発表し終わった後に発表者は自分の席に戻り、聞いていた児童と共に、出来上がった作品を読み取り、意見を述べる。単元の授業が全て終わった後に、国語での学習の記録として学級通信を書く。家に帰って保護者と一緒に学級通信を見ながら学習について振り返ることができるように、すべての児童が関係する内容で、具体的な活動の記録を書く。

② 支援が必要な児童を配慮した授業づくり

A児は、言葉から想像することが得意である。言葉集めの活動では、意欲的に取り組むことができると思われる。言葉集めをする際には、ワークシートの枠で、書く範囲を限定することで、活動に取り組みやすくすることができる。後で活動の記録として見返し易いものとするができる。友達の連を受けて、自分の連を続ける活動では、友達の思いを汲んでの読み取りが難しいことが予想される。友達の詩の言葉から一つ言葉を選ばせ、印を付けさせることで、どの言葉を受けて自分の連を書くのかという点を意識して書かせたい。

B児は、言葉から想像を膨らませることは楽しんで行うことができる。また、擬音語で表すこともできると思われる。いきなり詩を書くとなると難しさを示すことが予想されるが、段階的に、言葉集めを楽しみながら、言葉を選ばせ、詩にすることにつなげていくことで、活動に参加させたい。

C児は、友達との対話を通して想像を膨らませて、言葉集めをしたり、詩を書き進めることができると思われる。初めて言葉集めをする際には、同じ題を選んだ友達とペアを組み、個別で集めた言葉をペア同士で確認し合うことで、言葉を広げたい。また、擬音語を想像して書く活動は行いやすいため、言葉集めのヒントとして、想像をして「どんな音が聞こえる？」と問いかけたい。

3. 教師力向上実習の実践

(1) 学級活動『体で、顔で、心でうたう』

<本時の目標>

「男女同士、楽しく歌を歌い、関わりを深める。」

休み時間に男子は男子同士、女子は女子同士で男女分かれて遊ぶ様子から、学級内の男女同士の仲を深めることをねらいとして、全員参加の授業を目指した。

<教材について>

全員が興味を持つことができる教材として、ディズ

ニー映画「アナと雪の女王」の挿入歌の「とびら開けて」を選んだ。この映画は世界的にも注目されており、学級の何人かの児童も映画を見たことがあるという話を聞いていた。「とびら開けて」という歌は、男女の掛け合いがあり、映画では、好意を抱いている男女二人が踊りながら歌う楽しく明るい歌である。ねらいとした男女の仲を深め、全員が授業に参加できる教材として、「とびら開けて」はお互いに関わり合いながら歌うことを楽しめる歌としてふさわしいと考えた。

<指導過程>

	子どもの活動	教師の支援
導入	1. 「とびら開けて」の映像を見る。 2. ペアでストレッチをする。	・登場する二人の関係を伝え、仲を深めるための活動であることを伝える。 ・教師が模範となり、ストレッチを行い、児童に真似をさせる。
展開	3. 映像を見ながら全員で口ずさむ。 4. グループで歌う。 5. 自分の役を歌う。 6. 本番の歌を歌う。	・映像の表情のマネをしながら歌わせる。 ・笑顔で歌わせる。 ・目を大きく開けて歌わせる。 ・友達と目を合わせながら歌わせる。
まとめ	7. 振り返る。	・一番頑張ったことを班で話し合わせ、発表させる。

<実践の概要>

授業の「視覚化」のために、体ほぐしのストレッチを行う際に、私とA教諭の二人でペアになり、児童の前で、肩を落としたり、腰を曲げて脱力したり、腕を引っ張って筋肉をほぐしたりして、具体的な動きの手本を見せた(資料1)。歌を歌う際には、体や顔を使って、全身でリラックスしながら楽しく歌を歌うことができるようにするために、見本として映画で使われている映像を、電子黒板を使って流し、児童に見せた。映像は主人公の楽しそうな表情や仲良く踊る二人の動きなどが強調して作られているため、視覚的に分かりやすい手本となると考えた。加えて、歌を歌う時には、教師が両手を広げて、主人公が歌う様子を真似して児童の前で歌を歌った。映像を手本として示すだけでな

く、教師の動きを手本として見せることで、体を使って歌うことを具体的に示した。歌詞は、男女別で歌う部分に分かり易いように、男子は青、女子は赤でアンダーラインを引き、見やすいように模造紙に拡大して黒板に貼った。



【資料1 視覚化：ストレッチの手本を見せる】

授業の「焦点化」のために、歌を歌う時に、笑顔で、目を大きく開けて、友達と目線を合わせながら歌うという三つの課題を具体的に示した。そして、歌を歌うごとに、今は何に気を付けて歌を歌うのかという課題を限定して提示した(資料2)。8回歌を歌わせる中で、1回目と2回目は、笑顔で歌う、3回目、4回目、5回目は、目を大きく開けて、6回目、7回目、8回目は友達と目線を合わせて歌うことを指示した。課題を限定することで、今何をすべきかを明確に示すことができると考えられる。授業の最後の振り返りでは、一番頑張れたことを一つ挙げさせた。一人一人に振り返えらせ、感想を発表させることもできるが、一番頑張れたことと限定することで、課題に対する振り返りを行うことができた。



【資料2 焦点化：課題を限定して示す】

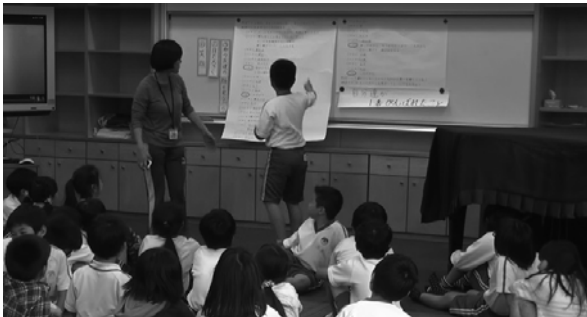
授業の「共有化」のために、脱力のストレッチを男女のペアで行わせた(資料3)。手本で示したストレッチのポイントを互いに意識し合い、口頭で確認させながらペアでストレッチを行う人と、補助する人に分担して、終わったら交代して取り組ませた。また、歌を歌う時の課題の一つとして、友達の間を見て歌うとい

う課題を提示した。大きく開けた目やにこにこした表情、少し恥ずかしそうな表情を見合うことで、課題を共有しながら、同じ活動に取り組むことができた。



【資料3 共有化：ペアで脱力のストレッチを行う】

支援が必要な児童の特性を踏まえた授業展開として、A児は友達と楽しく関わりながら、グループで歌の練習をしたり、振り返りを行ったりすることができていた。一番頑張れたことの振り返りの発表では、挙手をし、「自分のセリフを、その時の気持ちになってやることができた。」と意欲的に発表することができた（資料4）。



【資料4 グループで話し合ったことを発表することができた】

B児とC児は、ペアでの脱力のストレッチの際に、具体的にすべき動きを理解し、このようにするのはないかと、互いに動きについて確認し合い、活動することができていた（資料5）。



【資料5 ペアで動きを確認しながらストレッチを行う】

（2）国語『漢字辞典の使い方を知ろう』

<単元の目標>

- ・漢字辞典の仕組みを知り、部首索引、総画索引、音訓索引を使って漢字を探す方法を理解する。
- ・三つの索引を使って、漢字の読み方や意味、その漢字を使った言葉などを調べる練習をする。

漢字辞典は、今回授業で初めて取り上げる。漢字辞典には漢字の成り立ちや意味、熟語の意味や使い方が掲載されているという点を新しく知ることを含めて、漢字辞典の仕組みを理解させ、調べる活動を通して、漢字辞典や漢字そのものに興味を持たせることをねらいとした。また、漢字辞典を正しく速く使えるように何度も漢字を調べさせることで、授業の中で、漢字辞典を使うことに慣れさせ、日常生活で漢字辞典を活用する意欲を高めることもねらいとした。

<指導過程>（1/2）

	子どもの活動	教師の支援
導入	1. 漢字辞典の仕組みを確認する。 2. 漢字辞典の三つの使い方を確認する。 3. 本時の課題をつかむ。	・漢字の読み方、意味、成り立ちが調べられることをフラッシュカードで強調し、黒板に貼る。 ・「鏡」は偏が分かりやすいため、部首索引で調べ、「用」は画数が少ないため、総画索引で調べ、「習」は音訓索引で調べると速いと伝え、調べさせ、実感させる。
速く正確に漢字辞典で漢字を調べよう		
展開	4. 自分の名前、家族の名前を調べる。 5. 漢字辞典で漢字を調べて気付いたことを書く。 6. ホワイトボードに漢	・漢字の意味をワークシートに書かせる。 ・漢字辞典の便利さや漢字の面白さに気付かせる。 ・友達の発表を

	字の意味を書き、気付いたことと思ったことを発表する。	聞き、他の漢字についても関心を高めさせる。
まとめ	7. 振り返る。	・漢字を調べてみて、知っているつもり漢字も調べてみると面白い発見があったことを振り返らせ、漢字辞典を日頃の学習に活用する意欲を高める。

<実践の概要>

授業の「視覚化」のために、部首索引を使った調べ方をフラッシュカードで示し、番号を付けて手順を明確にした(資料6)。「鏡」を、部首索引を使って調べる時を例に挙げ、黒板の字をなぞりながら示した。ペアで調べる活動を終えた後に、実際に調べることができたかを挙手で確認した。ペアでの活動を行ったことを視覚的にお互いに確認する事ができた。ワークシートについて、どの漢字を調べているのか、常に児童が意識できるように大きな枠で漢字を囲う形式にした。自分の名前を調べ終えた後に、代表の児童に、自分の名前の漢字がどのような意味だったかをホワイトボードに書かせた。友達の名前の漢字と意味を視覚的に示したことで、自分の漢字だけでなく、人の名前の漢字についても興味を持たせることができた。



【資料6 視覚化：自分の名前の漢字の意味をホワイトボードに書いて発表する】

授業の「焦点化」のために、どの漢字を、どの索引を使って調べると速く正確に調べることができるかを実感させるため、「鏡」「用」「習」の3つの漢字に限定して調べ方を検討させた(資料7)。実際に調べる活動では、自分の下の名前を一字選んで調べさせた。名前から選ばせる際に、名前の中の下の名前と限定することで、素早く調べる漢字を選ぶことができた。



【資料7 焦点化：どの漢字をどの索引を使って調べるか考えさせる】

授業の「共有化」のために、部首索引を手順通りに正しく使うことができるかを、ペアで確認させた(資料8)。ペアの友達が自分の使い方を見て、確認してくれているため、どの児童も主体的に取り組むことができた。また、ペアの両方が調べ終えるまでの時間を制限したために、素早く行う姿勢が見られた。



【資料8 共有化：部首索引の使い方をペアで確認する】

支援が必要な児童の特性を踏まえた授業展開として、A児は、手順を明確に板書し、ペアで調べ方を確認させたことから、漢字辞典の使い方を理解し、友達と同じように、活動に参加することができていた。また、友達のワークシートを覗き、友達の下の名前の漢字の意味について関心を示していた。



【資料9 友達と調べ方を確認する】

B児は、自分の名前を調べる活動では主体的に調べ、漢字の意味を丁寧にワークシートに書き、母親が前に説明してくれた名前の由来をと照らし合わせ、満足するような様子だった。

C児は、速く自分の名前を調べ終え、家族の名前を調べる活動に移り、集中を途切れさせることなく授業に参加することができていた。

(3) 国語『連詩にちょうせんしよう』

＜単元の目標＞

- ・連詩を作ることに興味を持ち、想像を広げて友達と連詩を作ることができる。
- ・完成した作品を読んで、自分や友達の言葉の良さについて感想を伝え合うことができる。
- ・想像を広げて、詩の題材や言葉を読み取ることができる。
- ・想像を広げて、題に即して言葉を選び、語と語をつなげて連詩を作ることができる。

連詩を作る活動を通して、言葉から想像を広げ、ふさわしい言葉を吟味する力、書いたものを鑑賞し合い感想を交流する力を付けることをねらいとした。児童には、より多くの言葉を想像できるようにし、何を基準に、どんな言葉を選ぶかという点を意識させたい。また、書いたものを発表し合い、自分たちで詩を作ったことに対する自覚と、詩を作った達成感を味わわせたいと考えた。

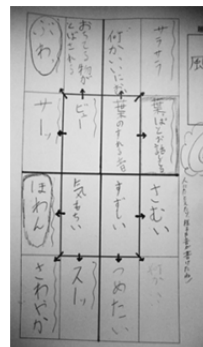
＜指導過程＞（4/7）

	子どもの活動	教師の支援
導入	1. 前時の連詩の作品を発表する。 2. 本時の課題をつかむ。	・活用することができた表現の工夫（比喩、繰返し、擬音語）を教師が評価し、自覚させる。 ・声に出して、課題を全員で読ませ、認識させる。
グループで連詩にちょうせんしよう		
展開	3. 連の役割について理解する。	・「玉子」という題で絵を示し、起承転結の連の役割を理解させる。 ・転を「驚きの転」として、チョコレート

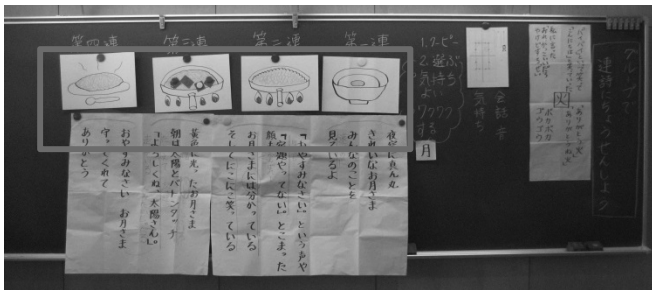
	4. 題を決める。 5. 言葉集めをする。 6. 第1連を書く。 7. 第2連を書く。	ラッシュカードを貼り、理解させる。 ・題カードを引いて決めさせる。 ・音や、声、気持ち問い、形容詞や、擬音語、擬態語を書かせる。 ・3, 4行目は、音や会話を書くといいと伝える。 ・前の連を書いた人は次の人が想像しやすいように、強調する部分を意識して読ませる。
まとめ	8. 振り返る。	・書いた作品を互いに読み合い、本時の活動を自覚させる。

＜実践の概要＞

授業の「視覚化」のために、前時に書いた繰返しや比喩、擬音語などの表現の工夫がされていた作品から言葉を抜粋して、模造紙で示し、授業の導入で評価を行った。どのような表現が良いかという基準として示すことができ、その回の授業の時には、繰返しや擬音語の工夫ができる児童が多かった。言葉集めでは、ワークシートに表と矢印を使い視覚的に想像が広がるような形式にした（資料10）。起承転結の連の役割を理解させるために、「玉子」でオムレツを作ることを例に、絵で示した。また、前時で学習した「月」という連詩と例えの絵を比較させて、詩に出てくる言葉を追いつながら、連の役割を理解させた（資料11）。驚きとはどのような事か、絵と詩を照らし合わせて、絵を助けに、詩の中の言葉で理解することができた。



【資料10 視覚化: 視覚的に想像が広がるように矢印を加えた言葉集めのワークシート】



【資料 1 1 視覚化：連の役割を、例えを使って絵で示す 焦点化：驚きの第三連に注目させる】

授業の「焦点化」のために、連詩を初めて書く際に、まず、言葉集めをさせた。目を閉じて、言葉から連想されるものや、音、気持ちや様子などを問い、ワークシートに書かせた。形容詞や、擬音語などの言葉を書くことができた児童が多かった。詩の連の役割を理解させる際に、特に転となる第三連に限定して注目させた。例えを使い、驚きの第三連では、チョコレートを入れるという展開に驚いた様子で、「そういうことね。」と納得した様子が見られた。(資料 1 1 の囲み部分参照)

授業の「共有化」のために、第一に、初めて連詩を書く際には、書いてみたい題のアンケートをとり、同じ題の児童同士でペアを組んだ。ペアで助け合いながら、詩を書き進めることができた。第二に、連詩を書く活動の導入では、児童が書いた連詩の中の表現に、繰り返しや、擬音語などが使われている連詩を紹介した。火という題で、ポカポカやゴウゴウといった表現があり、この共有を通して、自分が感じたままに言葉に表現することを価値づけることができた。また、この共有により、紹介した言葉を書いたペアの方をみんなが向き、微笑んでいた。連詩を書くことに対する意欲が高まったと感じた。第三に、ペアやグループで連詩を書く際には、前の友達が書いた連詩をしっかりと読み、どのような思いで書いているかを想像しながら、次の自分が担当する連を書くために、前の連を書いた児童に、書いた内容を音読させた。聞く児童は、しっかりと相手が読む言葉に耳を傾けていた。自分が書いている連に対する関心を高めることができたと思った。第四に、完成した連詩を発表する際には、発表した児童にも、自分たちが書いた連詩に対して、評価をさせた。全員が同時に客観的に一つの連詩を評価することで、一人一人が授業に参加できたと感じた。第五に、単元の全ての授業が終わった後には、学級通信に授業の記録を書いた。「太陽」「雲」「海」「空」という題で連詩を作ったことや、やまびこを音の鏡などと、表現を工夫できたことを具体的に書いた。配布した後には、児童から、お母さんと学級通信を見て、お話ししたよという声を聞くことができた。

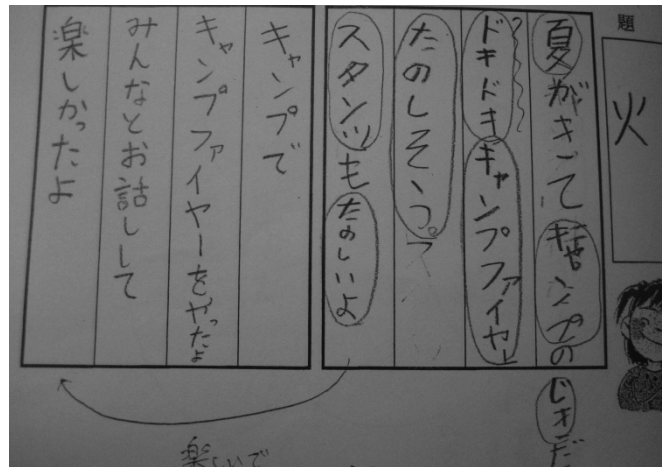
支援が必要な児童の特性を踏まえた授業展開とし

て、A児は、表を用いたワークシートに、読み取れるたくさんの言葉を書くことができた。また、同じ書きたい題を選んだ友達と相談をし合いながら、楽しんで連詩を書くことができていた。



【資料 1 2 言葉集めの活動でたくさんの言葉を集めることができた】

B児は、「火」という題の言葉選びでは、ペアの児童と相談しながら、12個の言葉を集めることができていた。ワークシートに記入する枠が広いと、言葉を抜粋して、書くことができない。枠を狭くしたことで、適切な長さの詩が書けていた。



【資料 1 3 枠を狭くしたため、言葉を抜粋して書くことができた】

C児は、言葉集めの段階から、自分なりの表現で言葉を書くことができていた。そのような部分を認めながら取り組ませた。発表の授業では、友達の書いた鳥という連詩に出てくる言葉で、「ぴちぴち」という表現に注目し、自分では、思いつかない言葉で書けていて良かったと、友達の表現の工夫に気付き、発言することができていた。

4. 実践を通して分かったこと

ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた子ども

もが全員参加できる授業づくりを目指して、授業の「視覚化」「焦点化」「共有化」に取り組んだ。

授業の視覚化には、教師が動きの手本を見せたり、図に示したり、表にまとめたりするという手立てがある。教師が動きの手本を見せることで、児童は、目を向け、体を向けて、しっかりと注目することができる。動きの手本を見ることで、誰と今から何をするかについて明確に児童に理解させることができる。図にする場合には、教師がまとめた図を児童に理解させる段階が必要である。図を児童に声を出して読み取らせる活動を加えることで、理解が深まり、何に注目すればよいかを児童は理解することができる。表にまとめる場合には、単純に表に埋めることをすればよいため、今から何をすればよいか分かりやすい。また、表にすることで、児童自身の視覚的な学習の記録とすることができ、前時の振り返りにも用いることができるし、学習に対する達成感を得ることができる。教師が、手本を見せたり、図や表で視覚的にすることで、児童に、これから何をするのかや、何に注目すべきかを分かりやすくすることができる。ただ、どの方法でも、気を付けるポイントを合わせてフラッシュカードにして文字で板書に示すことより理解しやすくすることができると思った。

授業の焦点化は、各回の授業の中で、特に学ばせたい点を限定することである。一時間の授業の中で、様々な活動が含まれている場合には、授業のねらいから、主となる活動を限定し、その活動の中でつけたい力を限定することが大切である。そして、つけたい力を限定した際に、どのように説明し、どのような活動をさせるかに関しても、限定する必要がある。説明を限定することで、児童に分かりやすく伝えることができる。また、活動も限定することで、一つの活動に集中させることができる。このようにすることで、いくつもの課題を同時にこなすことが苦手な児童も活動に参加することができる。また、取り組ませる際には、児童にとって身近なことや、児童が簡単だと思うことに焦点を当てて、取り組ませることが良いと思った。また、授業で焦点化する分、授業では焦点を当てなかった部分にも児童の興味が広がるように、関連する他の事柄などを紹介することも必要だと思った。

授業の共有化は、ペアやグループでの活動を取り入れ、一人一人が表現する機会を多くすることである。表現するためには、表現する中身が必要になる。そのため、児童は必死になり、何を表現すればよいのかについて主体的に考えることができる。個別で表現する内容について十分に考えさせた上で、ペアやグループで共有することで、個別では全く考えが思い浮かばなかった児童も、考えるヒントを得ることができ、友達からの学びを通して、授業に自然と参加することが

きる。また、ペアやグループでの共有の後に全体での共有を予定している場合には、全体での共有の踏み台とすることができ、児童が全体での共有に参加する自信や意欲をペアや、グループでの共有で得ることができると思った。また、ペアで共有を行うことで、ペア同士で、取り組みに対する姿勢や、正確に取り組むことができているかとチェックし合うこともできる。ペアでチェックし合ったり、意見を述べあう際には、互いにチェックする視点を具体的に与えたり、友達の考えを聞く視点や、自分の考えと友達の考えを比較する視点を与えることも必要である。

IV 教職大学院での学びを生かして

教職大学院の実習では、小学校2校、中学校1校の児童、生徒と関わった。学級を構成する人が異なるので、当たり前だが同じ学級は一つもなかった。それぞれの学級で、別々の難しさを抱える児童に直面した。また、実習以外では、教職大学院の授業において、応用領域の現職の先生方や基礎領域の仲間から、さまざまな困難を抱える児童についての話聞いた。

実習において、継続的に児童の抱える難しさについて向き合った。まず、目の前の児童は、どのようなことに対して困っていて、どのようなやり方であれば、困ることが無いかを、しっかりと観察し、把握することに努めた。そして、そのような児童の特性から、仮説を立てて、授業であれば、教材の視覚化、焦点化、共有化を行い、児童と共に難しさに向き合った。実習を通して、実習以前には、〇〇が苦手な児童としか捉えられなかったが、何に対して、どのような状況で、本人や周りの児童、教員がどのような困難を抱えているかなど、具体的に捉えることができるようになった。

児童の特性に合わせながら、授業づくりを行ったことを通して、児童が抱える一つ一つの難しさを見逃さず、継続的に、向き合うことの大切さを学んだ。教職大学院を修了し、4月から出会う児童一人一人の特性をつかみながら、一人一人の難しさに向き合い、全員が参加できる授業をつくることのできる教員になりたいと思う。

<参考文献>

『授業のユニバーサルデザイン 全員が楽しく「わかる・できる」国語授業づくり』(授業のユニバーサルデザイン研究会編著、2012年、東洋館出版社)

『授業のユニバーサルデザイン vol.2「全員参加」の国語授業づくり』(授業のユニバーサルデザイン研究会 桂聖・廣瀬由美子編著、2011年、東洋館出版社)

授業のユニバーサルデザイン研究会、桂聖
<http://www.udjapan.org/> 2015年1月確認